

## 検証ナチスは「良いこと」もしたのか？

本書はナチズム研究者の小野寺拓也・田野大輔著の肉厚の岩波ブックレットである。表紙裏から。ナチスは良いこともした」という言説は、国内外で定期的に議論の的になり続けている。アウトバーンを建設し失業率を低下させた、進んだ福祉政策や家族支援政策を導入した一功績とされがちな事象をとりあげ、ナチズム研究の蓄積をもとに事実性や文脈、結果を検証。歴史修正主義が影響力を持つなか、多角的な視点で歴史を考察することの大切さを訴える。

本書を多くの人に読んでもらいたい、そのためにも「おわりに」の「ならず者国家」としてのナチ体制についてだけ紹介しておきたい。

本書に目を通せば、「ナチスは良いこともした」などという主張がいかにも不正確で一面的であるかがよく理解できるはずである。

とくに短期間で失業問題を解消したとされるヒトラーの経済政策については、ヴァイマル共和政末期の景気浮揚策が効果を上げつつあったこと、労働奉仕制度や徴兵制度、結婚資金貸付制度などの導入により若者や女性を労働市場から退場させたこと、賃金抑制など労働者に負担を強いた結果、労働者の生活水準が低下したこと、雇用回復に決定的に寄与したのが巨額の負債によってまかなわれた軍需経済だったことなどが明らかにされている。

独裁権力を握ったヒトラーは、アウトバーンの建設や格安の大衆車の開発、歓喜力行団の旅行事業など様々な目玉政策を打ち出して国民の期待をかき立てたが、それらの政策を特徴付けていたのが、国民の間の格差や対立の解消をめざす「民族共同体」の訴えだった。

だが「民族共同体」は健康で生産性の高いドイツ人＝「民族同胞」を包摂する一方、人種的・社会的に「劣等」とされた人びと＝「共同体の敵」を排除するという二面性をもっていた。結婚資金貸付制度の導入といった家族支援策にしても、民族・国民全体にとって有用な「民族同胞」の保護・育成をはかるもので、ユダヤ人や政治的敵対者、障害者や「反社会的分子」などといった人びとはそうした支援の対象から除外されていた。そして障害者には強制断種、「安楽死」という運命が待ち構えていた。さらに占領地、ユダヤ人、外国人労働者からの資金・物資・労働力の収奪によって、戦時経済のかなりの部分が成り立っていた。

この包摂と排除という二つの側面が分かち難く結び付いていた。「民族同胞」向けの様々な優遇措置は、生産性や有用性、人種的価値などを基準にした線引きを前提にして成り立つもので、「共同体の敵」に対する福祉の切り捨てや経済的収奪、さらには物理的抹殺といったネガティブな措置と表裏一体の関係にあった。この関係はやがて、戦時中にグロテスクな形で顕在化した。

(2023年8月20日)